

## 論文

# Nelly Dean について

—彼女の感情と行為—

服部 茂

### 要 旨

家中の合鍵を所有し、屋敷の女中、使用人らを束ね、手際良く家事をこなし、幼子の乳母の役割を果たし、積極的に野良仕事にも出かけるばかりか、主人の側近をも務める召使い Ellen Dean、通称 Nelly は、*Wuthering Heights* (1847; Emily Brontë) の脇役にして、蔭の主人公である。読者は、Nelly が *Wuthering Heights* (以下、the Heights と記す) と Thrushcross Grange (以下、the Grange と記す) に仕えたときに体験した回想話を聞き、両家で起こった出来事の全貌を知る。彼女の淀みない語り口に引きつけられ、彼らも Lockwood 同様その物語に引き込まれ物語を追う。

孤児である Heathcliff が、突如として the Heights に連れて来られ Earnshaw 家の家族の一員となったことから始まり、彼を取り巻く人間関係や人間模様、Nelly 自身の日常生活の出来事、そして、Heathcliff が最終的に、両家の不動産、財産を本来の所有者から奪い取る二世代にわたるその過程を Nelly は詳細に語る。彼女は、それぞれの出来事に立ち会うだけでなく、両家の人たちと密接に関わり、彼女自身も当事者として大きく関与する。そのとき、Nelly の感情の起因による彼女自身の独自の判断や行動がその後の事の行方と、ひいては、Heathcliff が企てた計画にもその影響が及ぶ。何が召使いとしての Nelly にそうさせたのか。彼女のその行動の結果、どんな成り行きに至ったのか。

本論では、その語り手である Nelly Dean の人物像に焦点を当て、彼女がどんな女性かその実態を明らかにし、その上で Nelly が取った独自の行動を検証し、彼女が語る Heathcliff 物語とどのように関係したかを論ずる。

キーワード：人生，幸福，喜悦，不安，恐怖，脅え，絶望，後悔，憎悪，激怒，悲哀

## I

Nelly は、ハウスキーパーとして the Heights と the Thrushcross に仕えた召使いである。実際 Nelly も屋敷に住み込む生活者であるので、その他の人間とも密接に関わる。彼女がその物語中で下した判断と行動は、当事者として取った主体的なものである。だから、Nelly が Lockwood に語るその内容は、彼女が中心点となり、彼女側からみた出来事を一方的に語るのも、彼女の主観が際立つのもそのためである。Kettle は、‘The roles of the two narrators, Lockwood and Nelly Dean, are not casual. Their function (they the two most ‘normal’ people in the book) is partly to keep the story close to the earth, to make it believable, partly to comment on it from a common-sense point of view and thereby to reveal in part the inadequacy of such common sense. They acts as a kind of sieve to the story, . . .’<sup>1</sup> と Nelly と Lockwood の外部としての効果を指摘する。確かに Kettle がいうように彼らのやり取りによって物語の出来事の内容に整合性を与え話が整理される。しかし、Nelly は一見その立場から常識人で平凡な召使いと映るが、徒者ではない。教養を身につけ、修養もしているといい他の召使いと違うことを強調する。Nelly が体験したその出来事を巧みに自分の言葉にして語り直す表現力は、Nelly の知的さを示すとともに、彼女の特徴でもあるといえよう。Nelly はその表現力をもって当事者となる。だから、この物語における Nelly の決断、行動、所見は、その彼女自身の見解と私情を差し挟むことになるのである。したがって、Nelly の行動は、一貫として大局観的なものでとらえられるのではなく、近視観的であり場当たりのものである。そのときどきの自分にとって自己弁護が立つ予想を立てたり、その予想が外れたりする。

Nelly の判断が近視的であるのは、Lockwood も指摘するように、彼女が the Heights から一歩も出たことがなく、同じ顔と一連の行動ばかり見ていることが起因していることは確かである。Nelly 自身は、否定はしているが。あるパターンの生活環境と価値観、風習、風土が長年続けばやむを得ないことである。むしろ、この北の大地の静かな田舎で、Nelly が語る異状な出来事が起こっていることが、Nelly の語りを効果的にさせるのである。Lockwood も Heathcliff の墓を訪れた際、その静寂さの中にある喧騒に思いを寄せる。(XXXIV)

この土地と関わりをもたぬ Lockwood に語るということもあり、彼女自身その内容に脚色を施し、大袈裟に話している部分も感じられる。それは、迷信家でもある彼女の読書体

験からきているかもしれない。彼女の記憶に頼り、深く検証もされることもなく一方的に語られるので、独善的に陥ったり、都合の悪いところは省略したりするのもやむを得ない。だから、Nelly は、‘I’ll proceed in my own fashion’ (X) <下線部筆者> といって Nelly 流の語りであると、我われに断りを入れている。

## II

Nelly は、感情で判断する人である。Nelly が最初に自分の一方的な判断で行動したことは、‘I put it (=Heathcliff) on the landing of the stairs, hoping it (=Heathcliff) might be gone on the morrow’ (IV) と願いながら the Heights にやって来た Heathcliff を放置したことである。これは、Heathcliff が突如として家族の一員となり、Earnshaw 家の子どもたちと同等に扱われることから、Nelly は Hindley と Catherine に同情したからである。同時に彼女自身も Heathcliff の存在に強く拒否反応を起こしていたのである。召使いという立場でありながらこのころは、Nelly も未熟な少女でもあり成長過程でもあった。したがって、感情優先で自分本位になっていたのである。Nelly は、Heathcliff を嫌い、‘to say the truth I did the same; and we plagued and went on with him shamefully, for I wasn’t reasonable enough to feel my injustice’ (IV) と振り返る。Hindley の彼に対する気持ちは父親から愛情を奪った ‘usurper’ (IV) である。Hafley は、‘Nelly always likes to identify herself with the Lintons . . . After Cathy’s death she is promoted from ‘wait[ing]’ on her (chapter iv) and made Edgar’s housekeeper . . . the real greed is that by which Nelly has advanced to her position.’<sup>2</sup> と彼女の上昇志向を指摘し、その上で、Heathcliff が the Heights にやって来たことに関しては、‘Heathcliff—to whom she refers at first as ‘it’—was a threat to her position’<sup>3</sup> と彼女の屋敷の中の地位を揺るがす存在であると示す。Hafley は、Nelly 自身の立場の移動に重きを置いているが、一方、小著は、Nelly は Heathcliff が浸入することで Earnshaw 家が変わっていくのではないかという恐れ、つまり、家庭秩序の乱れに重点を置くと考える。その恐れが、Hindley と共に Heathcliff に対して心悪い行為をさせたのである。

Nelly は、Earnshaw 家に起こる不安を解消し、平穏な生活を保とうとする。特に、彼女は Earnshaw 氏の身体の様子を気遣う。Nelly は、自らの判断で Hindley と Heathcliff の仲違いの仲裁に入り、Earnshaw 家の和を乱さないようそれぞれに忠告したり、中和させたりして操作する。Nelly は、‘I hoped heartily we should have peace now’ (V) と願うのである。Nelly の初期の主体的な判断と行動は Earnshaw 家の調和を保つためのものであったのである。

Nelly が他の登場人物との関わり方を決めるのは、彼女の共感、同情、憎悪の感情である。Nelly とその他の登場人物との人間関係をみると、Hindley, Heathcliff, Edgar, Hareton, Cathy (Catherine の娘) とは良好な関係で、Catherine, Linton (Heathcliff の息子) とは決して良好といえない。特に、Catherine の場合は、はっきりと Nelly の感情を明言する。それを証明すべく Nelly は判断、行動するのである。

Frances が Hareton を産むと直に亡くなり、自暴自棄の生活を送り屋敷の風紀を乱し暴力と圧制で掻き乱しても Nelly は ‘I had not the heart to leave my charge; and besides, you know, I had been his foster sister, and excused his behaviour more readily than a stranger would’ (VII) と Hindley を擁護する。それは、同じ年齢にして乳兄弟であるためにその親和性が強いのである。Nelly は、Hindley のことをいつも心配するのである。あるとき、動悸がして不安になり Hindley の安否を確かめるために the Heights まで出かけたり、彼の生活環境から Hindley 自身の死にも疑問を呈す。Hindley の死に際しては、‘I confess this blow was greater to me than the shock of Mrs Linton’s death; and ancient associations lingered round my heart; I sat down in the porch, and wept as for a blood relation’ (XVII) <下線部筆者> と吐露する。このことから、Nelly と Hindley との関係が強いことが分かる。Nelly は Hindley とは、互いに育ったということで身内意識が高い。また、Heathcliff に関しては、Nelly は彼の側にも立ち、Hindley の不適切な扱いや、仕打ちに抗議したり、Heathcliff の Hindley に対しての報復を叱り付けたり、Edgar との違いで劣等感を抱く彼に Nelly 調で叱咤激励をする。前を向いて堂々と生きるよう説く。Nelly は、Heathcliff に彼のその境遇に同情し、いくらか更正するように手を貸すことを決意する (VII)。

### III

一方、同じ Earnshaw 家の実子でありながら Nelly もよく知っている Catherine に対して Nelly は強い嫌悪感を抱き、その態度は一貫して徹底している。Nelly の同性としての感情であろうか、Hindley のその湧き出る感情とは違う。Nelly の Catherine に対する態度は、Catherine が亡くなるまで続くのである。Nelly は、Catherine のことを ‘I own I did not like her, after her infancy was past; and I vexed her frequently by trying to bring down her arrogance’ (VIII) と Catherine に対しての感情を告白する。その理由は、Catherine の ‘arrogant’, ‘haughty’, ‘headstrong’ にあるという。Nelly は、‘... she (=Catherine) never took an aversion to me, though. She had a wondrous constancy to old attachments’ (VIII) と述べ、Catherine にとって Nelly は、召使いであると同時に友人の役割を果たし、Catherine は、Nelly のことを慕っている。Nelly はそのことを把握して知っている。Nelly

## Nelly Dean について

は一方的に彼女のことを嫌っているのである。Nelly の主観による感情が優先される。その Nelly の彼女を嫌うさまは、Nelly の意地悪い性格の一面がうかがえる。Catherine の逆境に際して Nelly は、快感を覚えるのである。ここは、Hafley のいうように、Nelly の ‘the villain’ であると認めざるを得ない。

Nelly は、あろう事か Catherine と Edgar との仲を裂こうとする行為にでるのである。この Nelly の行為は Catherine との関係が召使いという力関係を超越している。Nelly の単なる感情の処理でしかない。Nelly と Catherine のいざこぎに巻き込まれた Edgar は、Catherine の乱暴さの一面を知って絶望して家に帰ろうとする際、Nelly は Edgar に、‘Miss is dreadfully wayward, sir! I called out. As bad as any marred child—you’d better be riding home’ (VIII) と Catherine のことを悪くいい彼をそそのかす。しかし、このことはかえって二人の絆を深いものとし、裏面に出でしまう。この Nelly の行為は看過できない場面である。Catherine の人生にも影響を与えかねない行為である。だが、Nelly の未遂に終わる。万一、このことが成功したならば、Nelly のいう、‘I thought Heathcliff himself less guilty than I’ (XXVII) ということになる。これは、Nelly の確信犯としの実感がこもる言葉である。

Catherine はそんな仕打ちがあったとは、彼女らの関係を見る限り Catherine は知らない。その後、Catherine は、Nelly に Edgar と結婚することについて裁決を仰ぐと相談をするが、すべて否定される (IX)。Catherine はあらゆる理由を付け Edgar との結婚について同意を求めたり、正当化したり、執拗に説明をしたりする。その相談内容は、彼との結婚の有用性、Heathcliff との関係を力説する。Nelly は、彼女の支離滅裂な説明に嫌気がさし、呆れたりしながら、最後にはしびれをきらしてしまふ。Nelly には、Catherine の話しが打算としてしか聞こえないのである。Nelly には、Catherine が述べる葛藤が理解できないのである。この議論の中で、Nelly が的を得ていたことのひとつは、Edgar のお金を当てにする Catherine の浅はかな考えを指摘したことである。つまり、Earnshaw 家と Linton 家とは違うということ。Edgar が財産を持っていることと、妻となった Catherine がそのお金を自由に使えることとは別問題であるということである。この部分では Nelly の主観的な気持ちが優先され中、ある程度冷静な客観的判断であるといえる。ある意味、Catherine は、後年 Heathcliff が行った復讐同様、Linton 家の財産、不動産を当てにした点では、彼と思考が同じである。

Nelly は、彼女の人格を認めていないだけでなく、同性からくる嫉妬と、召使いとしての立場の調和を求め現状を保守しようとする気持ちが交差する。Nelly と Catherine の関係は、召使いと同時に相談相手である友人としての役割をもっていたが、彼女らはどちらともともに機能せず、良好な関係を築くことができなかった。Nelly が Catherine のこ

とが好きでないがため、二人の上下関係の差をなくさせてしまったのである。その感情が憎悪の形ででたのである。

#### IV

Nelly は、Catherine が Linton 家に嫁ぐ際、彼女から the Grange へ移るよう頼まれるが Nelly はこれを強く拒否をする。Edgar や Heathcliff、その他雇用条件に説得されて移る決意をし、ハウスキーパーとして働くことになった。しかし、Nelly は、依然として Catherine が好きではない。それ故、彼女のことを理解しようとしめない。Nelly は、Catherine を十分に世話をしているとはいえ、the Grange に余計な不幸をもたらす原因をつくるのである。

Nelly の 3 つの職務怠慢が間接的にも Catherine と Edgar に悪い影響を及ぼした。1. Nelly は、Catherine の病状を的確に Edgar 伝えなかったこと。Catherine に施すべく対応をしていない。Mathison も ‘the healthy Nelly’s complacent self-justification’<sup>4</sup> といって非難する。2. Catherine が 2 ヶ月間、脳膜炎で病に伏したにもかかわらず Nelly は十分な看病を果たしていない。その看病を直接したのは Edgar である。‘No mother could have nursed an only child more devotedly than Edgar tended her. Day and night, he was watching, and patiently enduring all the annoyances that irritable nerves and a shaken reason could inflict’ (XIII) と Nelly はまるで人ごとであるかのように述べる。淡々と無表情で語るようである。本来、Nelly は Catherine に付き添って Edgar 以上の看病をする義務があるはずである。3. Nelly は、Heathcliff の Catherine との逢瀬の約束をさせられる。万事手筈を整える。この結果、Heathcliff と Catherine が会っているところを Edgar に見つかり、Edgar にも精神的な苦痛を与える。そして、そのことが原因で、Edgar と Catherine との信頼関係を大きく揺さぶることになる。

これらの行為は、ハウスキーパーという立場にありながら、Nelly は十分にその役目を果たしておらず、勤める屋敷に不利益を与えている。この仕業は、Nelly の単独行為であり、しかも密かに行われたのである。‘Was it right or wrong? I fear it was wrong, though expedient. I thought I prevented another explosion by my compliance; and I thought, too, it might create a favourable crisis in Catherine’s mental illness . . . and I tried to smooth away all disquietude on the subject, by affirming, with frequent iteration, that that betrayal of trust, if it merited so harsh an appellation, should be the last.’ (XIV) と述べる。一応、Nelly は、自分のした行為を裏切りであると認めてはいるが、善悪ははっきり認識をしていない。自分が招いた悪い種であってもその結果を認めない。Nelly は、

## Nelly Dean について

自分の行動を都合よく解釈してその結果その事実がどのようになろうとも彼女自身、自分を正当化しようと言いかせているにすぎない。そのことで、Nelly はその場を安心させる。やはり、Nelly はここでも ‘I thought Heathcliff himself less guilty than I (XXVII) と考えているに違いない。彼女の独擅場である。Catherine が亡くなった際、Nelly は Heathcliff に同情して、亡き Catherine に会わせている。(XVI) これも Nelly の独断であり、Nelly のいうところの罪深いことである。彼女のこうした態度が Catherine の死を早めるきっかけになったといっても過言ではない。Catherine は、‘Nelly is my hidden enemy’ (XII) と Nelly に叫ぶ。Catherine は死の直前に、Nelly の本当の正体を見破る。

## V

物語の中で、Nelly とは無関係である動かぬ事実は、Heathcliff が Earnshaw 氏に拾われて the Heights にやってきたこと。Hindley が Heathcliff のことを憎しみ嫌ったこと。Heathcliff と Catherine が恋愛関係にあったこと。Catherine が Heathcliff を裏切ったこと。Heathcliff が富を得て戻ってきたこと。Heathcliff と Isabella が結婚したことである。Nelly が深くその行方に関わったのは、Cathy (Catherine の娘) と Linton の結婚である。この二人の結婚は、Heathcliff の復讐の一つの計画と一致している。

Heathcliff の復讐の企ては、Nelly の存在なくしては成立しないのは明白である。彼の用意周到の計画もある程度、運まかせなところもある。例えば、死亡がそれである。Edgar も Linton も亡くなってはじめて Heathcliff の計画が完結する。Cathy が Linton と結婚したのも Cathy が Linton のことが気に入っていたからである。Nelly が、体調を崩して3週間寝込んだ折、Cathy と Linton は、彼らの仲を育んだ。この Nelly の出来事も偶然のことである。Edgar も将来、Cathy は Linton と結婚するのが望ましいと考える。Nelly は結果として二人の結婚のコーディネーターの役割を果たした。

Nelly は、the Grange の召使いとして Heathcliff に毅然とした態度を取る。Nelly は親の Catherine と違い娘の Cathy には大きな愛情を注ぐのである。Nelly は、Cathy が the Heights で冷たく扱われていることを Zillah から伝え聞くと、‘I determined to leave my situation, take a cottage, and get Catherine to come and live with me’ (XXX) とまで考えるのである。これは、現実的でないと Nelly も悟るのではあるが、Nelly の Cathy に対しての偽らざる心境である。だから、Nelly は、召使いとして義務を果たすべく行動するが、それがかえって災いをもたらしたりする。Edgar には、Linton の病状を正直に報告しなかったため Edgar は Linton が Cathy と結婚することが、娘のためだと思ひ込む。もし Nelly が Edgar に、正しい情報を伝えていたら彼は違った手立てを講じて、状況も変わっていたか

もしれない。だが実際は、Heathcliffの意図のまま遂行される。このCathyとLintonの結婚への過程、たとえば、CathyがLintonとの交際を強く希望したり、HeathcliffがCathyとLintonと引き合わせる企ての仲介は、すべてNellyが行っている。Nellyのその一連の行動は、拒否→説得→了承のパターンである。Nellyのこのサイクルは、彼女の性格が起因している。つまり、感情に弱く、感情で動く人物なのである。Nellyは、Cathyを確実に監督しきれていない。激しい懇願や哀願には、最終的に押し切れ負けるのである。本来、Nellyは主人であるEdgarに正確な情報を知らせ、彼の気持ちを尊重し、Cathyの行動にも厳しく目を行き届かせなければならない。ハウスキーパーの立場と私心が混同してNellyも困惑する。そして、勢いCathyのLintonの手紙まで焼いてしまうという大胆な行動にもでる。Nellyは、感情という私情に押し流され、Nellyの考え癖である良い方に出来事を予想しては外れ、事態を悪化させてしまう。Heathcliffは、そんなNellyの性格を最大限利用したのである。Nellyは、彼女が無意識ではあるにせよHeathcliffの計画のプロローグの役割を果たしてしまった。Heathcliffのthe Grangeの乗っ取り計画にNellyの見えざる手によって加担したと言わざるを得ない。Nelly自身は、そのことに気付いていなく自覚もない。Lockwoodも気付かないのか、彼は彼女の行為を批判せず耳を傾けるだけである。

こういった結果は、Nellyが進んで企てた計画ではない。彼女の取り巻く環境、立場、人間関係がそうさせたのである。もちろん、Nellyの感情の行動からもわかるように、Heathcliffの悪とは別の副産物としての彼女の悪が存在することは確かである。Hafleyも‘Ellen Dean is the villain of the piece, one of the consummate villains in English literature’<sup>5</sup> といって厳しく彼女のことを糾弾する。しかしながら、この小論は、召使いとしてのNellyの性格と行為を考察するものであって、彼女の行動の結果の善悪を断罪するものではない。英国近代史において、重要な職業の一つを担った召使い業の行動を忠実に現す「うるさ型」<sup>6</sup>の召使いの半世紀を描いたものであると捉えるのである。

## VI

Charlotteは、‘For a specimen of true benevolence and homely fidelity, look at the character of Nelly Dean’<sup>7</sup>とNellyのことを高く評価している。このイメージは、Nellyの陽気さ、家事を手際よくこなす、働きものであるところからくるのである。彼女は、Earnshaw氏から言わせると‘a cant lass’ (VII)なのである。Earnshaw氏の下では、Nellyは召使いとしての義務を果たし、Earnshaw氏からもその手際の良い家事を誉められて自信を深めている。

## Nelly Dean について

Nelly は道徳的には、良心的である。Nelly の決断と行動はその出来事とその結果から悪いイメージが伴うが、決して悪い面ばかりではない。Nelly は感情で動いてしまうのでときどき我を張り、独善的になったり、意地悪になったりする。根本的には、思いやりのある少し太めの女性である。

Nelly もまた屋敷に住む込み、仕事に従事している召使いの身である。上流家庭の召使いは、それなりの待遇で雇われ、衣食住が保障されるという。彼女にとって最大の恐怖は屋敷からの解雇である。もともと、彼女も ‘a poor man’s daughter’ (VII) であり出生すら明らかにしていない。Nelly の心に宿るものは、不安、恐怖、脅えが横たわっている。彼女が語る登場人物には、love, happiness, sorrow, hate, anger, jealousy, fear, despair, regret の感情が色濃くあらわれる。それらを解消するために彼女は判断し行動するのである。他方、Zillah は Nelly と違いその点、割り切っている。主人の命令には、それがどんなに理不尽なものであっても忠実である。彼女は、仕事として従事しているだけである。そこには、彼女の私情を挟むことはない。彼女自身も ‘I always refused to meddle’ (XXX) といっている。したがって、判断も行動もしないのである。その行為や出来事自体にも自分が不利益を被らない限り無関心である。Nelly は、彼女のことを、‘a narrow-minded selfish woman’ (XXX) とその Zillah の性格をとらえている。ただ、Zillah も Nelly も高慢な態度が嫌いなのは、一致している。Zillah は、‘I (=Zillah) own, I should love well to bring her pride a peg lower’ (XXX) といつて Cathy のことが好きではない。Zillah は、Nelly と違いおせっかいが嫌いだから Nelly のような事態には発展しない。その後、Zillah は the Heights を辞めている。たぶん、もっと条件の良い召使いの仕事を見つけたのであろう。

Nelly は、両屋敷に仕えることで成長している。彼女が幼年期から青年期まで過ごした the Heights では、仕事を通じて得た自己の存在と承認を通じて自己を高めていったのである。一例を挙げれば、the Heights 時代、はしかにかかった Hindley, Catherine, Heathcliff の 3 人のこどもの看病を根気よくしたことで、医師からその手柄を誉められる。Nelly は、そのとき ‘the doctor affirmed it was in a great measure owing to me, and praised me for my care. I was vain of his commendations, and softened towards the being by whose means I earned them’ (IV) と心境を語る。彼女は、賞賛と承認を受けることで召使いとして自覚をし、人として心を成長させていくのである。その成果が、Edgar との劣等感に悩む Heathcliff を励ます場面である (VII)。Nelly は、自分を肯定し、承認せよと説く。彼女は、Heathcliff の弱い人間性の一面をみることで、彼に対する見方を変えるのである。彼も、普通の少年ではないかと思うのである。Heathcliff に対する根本的な恐れは残っているものの、嫌悪の感情が和らぎ、彼とある程度の距離を保ちながら

接するようになったのである。彼とは対照的に、Nellyは、Catherineにはその人間性を見いだせなかったのである。その後、the Grangeに移りNellyのいう幸福な12年間(XVIII)は、the Grangeの中だけで外部とは接触しなかった生活によるものである。その家庭的平和のゆとりの中で、Nellyは、知的にも成長したのである。彼女は、the Grangeの読書室の本を読み教養を身につけたのもこのころであろう。母親のCatherineが以前、Linton家に感化されたように、Nellyもまた同じように感化されたのである。召使いが複数雇われている中、Nellyはハウスキーパーとして屋敷の運営にあたったことであろう。さらに、Nellyは自ら子どもを育児することで母性を開花させ、Nellyの家庭的なイメージを与える。同時に、NellyはCathyを育児することでEdgarに対しても発言力を増し、いまみてきたように彼女の決断や行動がEdgarらその周辺に影響を与えることになる。

最後には、Nellyは不安、恐怖、脅えから安心、幸福、平和の境地に達する。これは、本来あるべき暮らしの形で彼女が目指してきた理想である。CathyとHaretonの結婚という形で実現する。Nellyの直接関わっていない二人の自然な成り行きで辿り着いた関係である。Nellyの意図が入っていないその関係が彼女を安心させる。そして、またNellyが幼いころ体験した秩序ある生活を予想する。Heathcliffが現われる以前の環境に戻ったのである。Nellyは、‘there won’t be a happier woman than myself in England!’(XXXII)とその幸福感を噛み締めるのである。

## 註

作品からの引用は、すべてPenguin Book版による。Emily Brontë, *Wuthering Heights*, David Daiches, ed. (Harmondsworth : Penguin Book 1985) テキストにおけるその該当する章に関しては、引用に続き括弧内のローマ数字でそれを示した。

- 1 Arnold Kettle ‘Emily Brontë: *Wuthering Heights*’ in *Twentieth Century Interpretations of Wuthering Heights: A Collection of Critical Essays*, Thomas A. Vogler, ed. (New Jersey : Prentice-Hall, 1968), p.30.
- 2 James Hafley ‘The Villan in *Wuthering Heights*’ in *The Brontë Sisters Critical Assessments Volume II*, Eleanor McNeas, ed. (East Sussex : Helm Information, 1996), p.259.
- 3 *Loc. cit.*
- 4 John K. Mathison ‘Nelly Dean and the Power of *Wuthering Heights*’ in *The Brontë Sisters Critical Assessments Volume II*, Eleanor McNeas, ed. (East Sussex : Helm Information, 1996), p.220.

Nellyがする出来事の解釈の基は、彼女の肉体的健康であると分析し、その彼女の身体性にあると着目する。彼女の健康がFrancesの病弱さやCatherineの精神錯乱の身体的苦痛の理解を妨げるといふ。

## Nelly Dean について

- 5 James Hafley, *op.cit.*, p.257
- 6 小林彰夫『召使いたちの大英帝国』（東京：洋泉社 2005), p.48
- 7 Charlotte Brontë 'Editor's Preface to the New [1850] Edition of *Wuthering Heights*' in *Wuthering Heights* David Daiches, ed. (Harmondsworth : Penguin Book 1985), p.39.